**待降節第４主日　クリスマス礼拝　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年12月24日**

**「飼い葉桶の救い主」**

**イザヤ書9章1節～6節**

**9:1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。**

 **9:2 あなたは深い喜びと／大きな楽しみをお与えになり／人々は御前に喜び祝った。刈り入れの時を祝うように／戦利品を分け合って楽しむように。**

 **9:3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を／あなたはミディアンの日のように／折ってくださった。**

 **9:4 地を踏み鳴らした兵士の靴／血にまみれた軍服はことごとく／火に投げ込まれ、焼き尽くされた。**

 **9:5 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。**

 **9:6 ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。**

**ルカによる福音書1章1節～7節**

**2:1 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。**

 **2:2 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。**

 **2:3 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。**

 **2:4 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。**

 **2:5 身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。**

 **2:6 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、**

 **2:7 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。**

　**クリスマスおめでとうございます。2023年のクリスマスを迎えました。**

**皆さんはどのような思いで今年のクリスマスを迎えておられるでしょうか。喜びの中で嬉しい気持ちでクリスマスを迎えておられる方もいらっしゃれば、不安な気持ちや悩みや心配事を抱えた中で迎えておられる方もいらっしゃるでしょう。**

**今年はロシアとウクライナの戦争の終わりが見えない中で、さらにイスラエルとパレスチナの戦争が起こり今も争いは続いています。私はテレビのニュースで見たのですが、飼い葉桶ではなくてがれきの上に寝かされているイエス様の人形の映像がありました。ご覧になられた方も多いのではないかと思います。私はその映像を見た時に何か衝撃を受けました。これは戦争への抗議の意味で作られたものだそうですが、それと同時に貧しさ弱さの象徴である飼い葉桶よりももっと貧しく弱く悲惨な状況であるがれきの中にもイエス様は生まれて下さったという希望をも意味しているそうです。人間の罪がもたらす争いの只中にもイエス様はお生まれになってくださる。それは、イエス様がお生まれになられた約2000年前の世界と今の世界との状況が同じようなものなのです。人と人とが傷つけ合い、争いが続く世の中、今も昔も変わりなく続けられているその只中にイエス様はお生まれになられたのです。弱く小さな赤ちゃんのお姿で。「平和の君」としてお生まれになられたのです。**

**今から約2000年前、ユダヤの国はローマ皇帝アウグストゥスの力の支配のもとにありました。この世の力によって支配される不安と混乱という暗闇の中にありました。人々は重い税金に苦しめられ、住民登録は税金をかけるためのものでした。そのために、人々はそれぞれ生まれ故郷に行かなければなりませんでした。ヨセフとお腹に出産間近のイエス様を宿したマリアも例外ではありませんでした。ガリラヤのナザレからユダヤのベツレヘムへの旅は100キロ以上の道のりです。ヨセフとロバに乗ったマリアが長い長い道のりを、非常にゆっくりとした足取りで、途中で何度も何度も宿を取ってベツレヘムに向かっていきました。今回の旅がいかに困難で命がけのものであるのかは私たちにも容易に想像がつくと思います。**

**「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、**

 **初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」（6・7節）**

**と書かれています。私たちはここを読んだときにどういう状況を思い浮かべるでしょうか。ヨセフが出産間近のマリアのために必死になって宿屋を当たるけれども、「うちはいっぱいだよ」とことごとく断られて、やむなくマリアは家畜小屋でイエス様を産んで飼い葉桶に寝かせた。その場面が頭に思い浮かぶのではないかと思いますし、広く知られている場面だと思います。**

**ただ、実際はもっと厳しい状況だったようなのです。この当時は宿屋として今のホテルや旅館のように宿泊を職業としているところは少なかったようです。むしろ一般の家庭が旅人をもてなすというので部屋の一室を客間として開放したようです。ですからヨセフの宿泊の申し出を断ったのは一般の家庭の人たちです。つまり私たちと同じです。「うちはいっぱいだから」そのように断ったのは私達と同じ一般の人たちです。そして、そのように断った人たちの中には実際には誰も家に泊まっていないのに断った人もいると思います。出産という面倒な事には関わりたくないという人もいたでしょう。**

**そのことを7節の最後の有名な言葉は私たちの現実の姿を実に正確に現わしているのです。「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」今私たちが手にしている新共同訳聖書はこのように訳しています。しかし、もともとの聖書の言葉を直訳すると「部屋には彼らの場所がなかったから」なのです。宿屋という意味もあるでしょうが、むしろ部屋です。一般家庭の私たちが過ごす部屋です。その部屋に「泊まる」どころか居場所がないのです。**

**「部屋には彼らの場所がなかったから」ヨセフのためのマリアのための、さらにはイエス様のための場所がないのです。泊めるどころが居場所すらないのです。いてもらったら困るのです。面倒なことに関わりたくない、私は忙しい、私は知らないと拒むのです。それは心の中にイエス様を受け入れる余地がないことを現わしているのです。私はいらない、私は知らないとイエス様を拒んで外に追い出すという私たち人間の罪の姿を現わしているのです。**

**「部屋には彼らの場所がなかったから」ここに私たち人間の愚かさがあります。私たちだけが暖房のきいた暖かな部屋でくつろぎ、イエス様を寒くて暗くて汚い場所である家畜小屋の飼い葉桶へと追いやってしまう、そういった自分さえよければいいという自己中心的な愛のない私たちの罪深い姿を現わしているのです。**

**「飼い葉桶」というのは馬とか牛とかの家畜用のエサの草を入れるところです。決してキレイとは言い難い飼い葉桶は、生まれたばかりの赤ちゃんを寝かせるところではありません。その飼い葉桶にイエス様を追いやったのは私たちです。自分さえよければいいと、イエス様を飼い葉桶に追いやったのは私たちの罪の姿です。**

**ただ、神様からするとそんな寒くて暗くて汚い家畜小屋の飼い葉桶になど私の愛する独り子であるイエスを寝かせるわけにはいかない、そんな心に余裕のないイエスを拒む罪だらけの人間のもとにイエスを送るわけにはいかないと神様の方からイエス様を送ることを拒むことはできるのです。家畜用の飼い葉桶ではなくて、宮殿の立派なベッド、フワフワした暖かな赤ちゃん用のベッドがちゃんと用意されたところ、それは言い換えれば私たち人間が愛に溢れ争いもなく傷つけあうこともなくお互いに親切にして愛し合って仕え合って、とてもとても暖かな心の人ばかりの心のベッドが暖かくてフワフワのそういうところを選んでイエス様を生まれさせることは、神様ですからできるはずなのです。**

**でも神様はそうはされなかった。神様がイエス様を寒くて暗くて汚い家畜小屋の飼い葉桶に生まれさせたのです。私たちのイエス様を拒む罪の心汚れた心争う心、そんながれきのような心の只中にイエス様を生まれさせて下さったのです。自分さえよければそれでいいと心に余裕のないお前たちはダメだと神様は決して私たちをお見捨てにならずに、そんな私たちを愛して下さっているのです。その神様の愛の形として、わざわざ寒くて暗くて汚い家畜小屋の飼い葉桶に弱く小さな赤ちゃんの姿でイエス様を生まれさせて下さったのです。**

**それが何のためであるかは、やがてイエス様を私たちの罪を全て背負って十字架につけるためです。イエス様の十字架の死と復活によって私たちの罪を赦し、私たちを救いへと導くために神様はイエス様を私たちのこの現実の只中に生まれさせて下さったのです。**

**クリスマスが来ました。喜びの中で嬉しい気持ちであっても、反対に不安な気持ちや悩みや心配事を抱えた中であってもクリスマスはやって来ました。飼い葉桶の中に、あるいはがれきの中であってもイエス様は私たちの現実の只中にお生まれになって下さったのです。主はきませり。神様は私たちを愛して下さっているのです。感謝をして、私たちも愛に生きましょう。**